
チョコミント

siro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チヨコミント

【Nコード】

N2922Y

【作者名】

s i r o

【あらすじ】

甘くて爽やかな、ある美術部の恋愛模様。

前編（前書き）

昔思いついた走り書きを発見してそれに肉付けしてみました。
学生の頃に描いてた、ほわほわした恋愛漫画です。

前編

”君はチヨコミントみたいだね”

”・・・先輩どうゆう意味ですか？”

”そのまんまの意味だけど？”

”・・・はあ”

それは熱い日差しも過ぎ、夏休みも終わり久しぶりの学校、久しぶりの部室。

他の美術部部員はまだ来ず、今日はこのままお開きかと思いつながらも久しぶりの憧れの先輩と一緒に小腹を満たすために買ってきた大好きなチヨコミントカップアイスをつつきながら

チヨコミントが好きだと言った日、先輩に言われた。

まだ暑い日が続くドキドキした放課後だった。

「・・・それってさ、くどいてるみたいじゃね？」

ふわっふわにパーマをかけ、綺麗にグロスをつけた唇はまるで天使

みたいな可愛らしい小顔の少女エリカが口悪く言った。

「あーそういわれればそうなのかな？でも意味不明な会話だったけど」

先輩との出来事を嬉々として報告したが、エリカの言いように肘を突いて考えてしまった。

「絶対先輩気があるって！！」

熱が入って人の机をバンバン叩くノリカは既に人の話を聞かずに勝手に妄想の世界へと旅たっていた。

「だってだって、美術室で二人つきり、”誰もこないね（男声）”、”そうですね（女声）””誰も来ないから二人つきりで買物にいっちゃおうっか？（男声）”でもでも先輩は心の中では本当は君と二人つきりの時間を誰にも邪魔されたくないしなっと思ってだね！！」

ヒートアップしていく友達を眺めながら、適当に相槌を打つ。

「あーはいはい」

私、沙耶花はありえない友達の妄想話を聞きながら先輩のことを思い出していた。

自分の容姿は可もなく不可もなく化粧つけがない17歳のめがね女子、成績も運動も並の並、高校デビューするつもりがあえなく挫折したタイプだ。

そんな私は美術部に入ったことで人気の先輩とお近づきになれた、それは部長でもある拓也先輩だ。

成績良し！顔良し！スタイル良し！おまけに優しくて女子にも人気！

これぞ 完璧 人間 ！

そんな人間いてたまるかー！！と思いつつも、いました、そしてや

つぱり何か違うんですね、惹かれちゃいます。それにどう突っつこうが崩れませんでした。

それだったら、部室に女子がわんさか来そうなんだけど、うちの学校は部員以外の部室への立ち入りは禁止されてるおかげで誰も部室には入ってこない、しかも美術部の部室に来る前にオタク研究部や生物部、科学研究部と、それはそれは濃い部活があるおかげでバリエードのように綺麗な女子たちは来れない。

女子達がキヤーカー騒ぐようものなら、部室から得体の知れないものが飛んでくるのだ。

かえるを顔面で受け止めた女子はちょっとかわいそうだった。

だったら部員として入ってきそうだけど、そこは先輩が作った規則によって入って来れなかった。

それは

入部するために3作品作成する。

- 1、自由に描いたもの
- 2、基礎デッサン（円柱と球体）
- 3、好きな画家やイラストレータの模写

まあ、ちよつとした絵が上手いこやガッツのある子なら、簡単にクリアできる内容だったが、入部した後がまた大変だった。

それは月1で作品を提出、かつ半年に1回以上は美術コンペや、作品応募に応募すること、それができないと簡単に退部させられた。そんな中、美術部員として生き残ったのは純真に絵を描きにきていた女子と男子だけとなった。

だが、絵好きとあって課題は毎回余裕で終わらせて、各自好きな作品を作っているような状態だ。

「あんたはニブチンなの!!!」
バンという音とともに現実に引き戻された沙耶花は、びっくりして目の前の友達を見返した。

「ちよつと人の話きいてんの?!」

「アハハツハハ。キイテルキイテルー」

ごめん、実はまったく聞いてなかったと心の中で謝罪しながら沙耶花はきになる先輩と進路のことではいっぱいだった。

沙耶花は未だに進路に迷っていたのだ、教師には遅いとせつつかれながら親は別に好きな所に行けというわりには、大学進学を快く思っていない様子だった。

教師陣は絶対に大学まで行けと言われたのだ、その言い分も沙耶花は分かっていた。今の時代高卒で雇ってくれる職場は少ない上安月給だ、友達のお兄さんが大学まで出ていればこんなじゃなかったと嘆いていたのをよく聞いていた。

そのためにも沙耶花は大学に行きたかったが、美大はお金もかかれば将来が見えないと親にも教師にも言われてしまい行きたい大学を言えないでいた。

将来のことを考えて入れとまで言われれば、成績もそこそこで塾に通っていない沙耶花にはキツイ言葉だった。

悶々と悩んでいる間に、沙耶花の好きな時間が訪れた、それは放課後の部活の時間。

今日は人の集まりもよく先輩や後輩もきていたが、ある集団から皆一歩引いていた。

「私は、普通科に行くわ。絵はデザインフェスタでそこそこ売れるし、大学の課題で追われたくないからね。このままフリーでいくわ」

「お前なくそんなんじゃ稼げねーよ。」

「何よーちよつと絵がコンペで賞に入ったからって、あんたの絵がそんなに上手いの？今どき油絵なんて、今はCGよ」

「はあ？！そんな機械に頼って基礎もなつてないやつが何いってやる、自分の腕でかけないから機械に頼るんだろ、はっ」

「なんですって！！」

うっはータイミング悪い時に入ったー！

沙耶花は入り口で立ち止まって言い争いをしている先輩達を眺めた、片方はCGを駆使して絵をかくのが上手い先輩、もう一人はアナログ人間と豪語し油絵やデッサンが上手い人なのだ、ちなみにどちらの先輩も自分以外の絵は下手だとこき下ろすので似たもの同士だと沙耶花の中では思っている。

「またやってるの？あいつら」

頭上から聞こえる声に沙耶花は見上げると先輩がこつりと沙耶花の頭の上に顎を乗せてきた。

「先輩・・・重いです、セクハラです」

「いやーちよつどいい位置にあるから」

そう言って拓也先輩は沙耶花の上からどいて、他の部員に挨拶し始

めた。

それに気づいたほかの先輩達はホツとしたように先輩を呼んだ。

「拓也〜うっす。」

「拓也、なんとかして」

「こいつら煩い、なんとかして」

口々に皆言うさまに、拓也先輩は苦笑しつつ言い争いを続ける先輩二人の目の前に割って入った。

「「じゃまよ^だ!!拓也!!」」

「すげースピーカ」

両脇から怒鳴られた拓也先輩は苦笑しながら肩をすぼめた。

「うっさい!!この時代遅れの爺やろっ、今日こそ許せない!!どいて」

どかない拓也先輩に痺れをきらしたミウ先輩が立ち上がるが、それを手で制した。

「はいはいはい、ミウちゃん落ち着いて。君達二人が自分の絵にプライドを持っているのは良く分かったから。

ちよっと静かにしようか」

その言葉に二人は固まった。

部員は皆心の中であ〜あとため息を着いている事間違いないと思しながら、沙耶花は自分の画材道具を棚から取り出して準備し始めた、お怒りモードの先輩には誰も逆らわないのだ、逆らおうものな

らノルマが課せられ最悪退部だ。
部員の先輩達はそんな拓也先輩を、独裁者、鬼、と言うがそこまで嫌っている様子はなく、むしろ仲がいい。

「沙耶花ちゃん、今回は何描くの？」

遠矢先輩が椅子を持ってきて沙耶花の隣に腰掛けながら聞いてきた。

「んーエツシャーの”徐々に小さく”にしようかと思ったんですが、途中で飽きそうなので有名な”滝”の模写をしようかと」

そう言つて、鞆から沙耶花は一冊の画集を取り出し開いて見せた。
そこには水車小屋とレンガの水路が描かれ、水路はジグザグに上がつていき水が落ちてもとの水路に戻るといふ、非現実的な水の流れと不可思議な遠近法で描いた絵が描かれていた。

「へー相変わらず沙耶花ちゃんてキチガイなものを選ぶねー、こないだはウィリアム・モリスのステンドグラスだったよね？」

「はい、セント・ステイヴン教会のガタカーです」

「あれね、背景全部草の装飾とか。よく描ききつたよな」

沙耶花が得意とするのは模写だった、自身でオリジナルに描くこともあるがただ綺麗に描けただけで巨匠といわれる人たちのような目が奪われるような作品ができず、満足できないため提出するものは全て模写作品になっていた。

だが、キチガイといわれるゆえんは明らかにA型だろうと思うくらい細かい絵を描く画家ばかりの絵を模写するためだった。

「そう言つお前は、先月の課題がまだ出てないんだが？」

拓也先輩が二人のノルマを追加して戻ってきた。

沙耶花の前に座ると、にっこりと遠矢先輩に微笑だ。

「チャント出シマスヨ？タダ今日八忘レタので、今月ノ課題ヲヤリマスヨ。明日ダシマス！一拓也様（悪魔）」
そう言つてそそくさと遠矢先輩は席から離れて、今月の課題作成の準備をし始めた。

「すごい棒読み」

「あはは、だね」

拓也先輩は笑いながら、先ほど机の上にだしたエッシャーの画集を手にとってページをめくつた。

沙耶花は他の部員同様、作品を作るために紙の用意をした。

「今回も模写にするの？」

「はい」

A3と描かれたベニアパネルを取り出し、紙とパネルの位置を確認すると水刷毛で紙を濡らしていった。

慣れた手つきで進めていく様を拓也先輩は見つめながら言った。

「オリジナル描いてみたら？」

その言葉に驚きながらも、パネルを紙の上にそつと置きながら答えた。

「でも・・・オリジナルだとヘタですし。インパクトもないですし」
紙をパネルに沿って折り曲げ、邪道だがホツチキスで紙とパネルと止めてから水張りテープ濡らしながら張っていった。

「そうかな？俺は結構好きだけどな」

思わず言われた言葉に手元がぶれて綺麗に側面に貼り付けていた水張りテープがずれてしまった。

慌てて戻している間に拓也先輩は前から居なくなり、違う部員の場所に行って会話をしていた。

何どうようしてるのよ、私・・・お世辞に決まってるじゃない。

そう心の中で呟きながら、水張りした紙が乾くまで模写をする絵のコピーを取りにいった。

コピー機は職員室の横の用務室に置かれているものを借りるのだ、コピーを取って格子を描いていく、書いたと格子同じ数分紙にも描き模写の準備は整った。

その頃になると、もう部員は各自の作品作りに没頭して静かになっていた。

響くのはキャンバスに走る筆の音や、鉛筆の音、ペンタブの音。

先輩との距離は机三つ分。

沙耶花も同じように空間に溶け込みながら絵に没頭していった。

前編（後書き）

一応補足説明

【以下ウィキペディア参考】

エッシャー

建築不可能な構造物や、無限を有限のなかに閉じ込めたもの、平面を次々と変化するパターンで埋め尽くしたもの、など非常に独創的な作品を作り上げた画家。

ウィリアム・モリス

多方面で精力的に活動し、それぞれの分野で大きな業績を挙げた。「モダンデザインの父」と呼ばれる。

この人は染物から家からステンドグラス、壁紙、印刷文字、政治活動といろいろしていて職種は本当に良くわからないです。

12

・沙耶花が模写した作品を見たい方は以下の方法で見れます。
セント・ステイヴン教会のガダカー

”セント・ステイヴン教会「身廊西」で画像検索

滝

”M・C・エッシャー 滝”と画像検索

後編

みんなの作品は、CG以外だったら乾燥棚に置かれているため何を今描いているのか見ることが出来た。

沙耶花は、早く来てしまった部室で自分の作品を取り出しながら、部員の作品を眺めていた。

その中に一つ不思議な絵が一つ紛れていた。

一面ミント色に塗られたキャンバス。

「誰のだろうか？」

不思議に思いながらも、沙耶花は自分の課題作品を終わらせるべく席に着いて描き始めた。

いつものように、繰り返しの日々が過ぎていくなか、ある日の朝エリカが沙耶花にスクープと言って椅子の前を陣取った。

「ど、どうしたの？エリカ」

「聞いて！拓也先輩好きな女の子居るんだって！！！」

「え・・・」

「まじ、びつくりじゃね?!今まで断るのにそんな理由つけなかったのに、今回はあの吉永先輩が告りに言ったらそう断られたんだって。」

「え、吉永先輩ってどこかの社長令嬢って噂の?」

「正確には、重役らしいよ。ってそうじゃなくて!あの高ビー女吉永が、今まで拓也先輩が使ってた断り文句を全部跳ねつけたら、先輩がそういつたんだって!」

「そっかあ」

まあ、いてもおかしくないよね。というか、こんなにモテてるのに彼女が居ない方がおかしいし、隠れて付き合ってたりにしてるのかな。沙耶花は、むかむかする思いに蓋をした。

彼女でもなんでもないのに、嫉妬するなんておかしいよね。そう心の中で呟いて。

その日の午後、部室ではその話題で持ちきりだった。

「あの拓也がね」

「先輩!拓也先輩の好きな人って誰ですか?」
後輩の女子の一人が手を上げて先輩達に聞いてきた。

「さあ〜俺らも知らないな。お前しってる?」

「私を知るわけ無いじゃない、むしろこっちが聞きたいわ。あ、沙耶花ちゃんは何知ってる?」

「いいえ」

沙耶花はムカムカする胸を押さえつけるように、キャンバスを机の上に置いた。

「俺・・・いや、なんでもないや」

遠矢先輩は何か言いかけて口をつぐんだ。

「何ですか！遠矢先輩！！言いかけて止めないてくださいよ。」
後輩に襟首掴まれ遠矢先輩は口を開いた。

「なんとなくなあゝあの子じゃないかな〜ていう人物が思いついただけだ。」

「「ええ！！てください教えなさいよ」」

「いや、俺の勝手な想像だし。」

ぎゃーぎゃー騒ぐ部室でなぜか、その声だけ凜と響き渡った。

「騒がしいけど、どうしたんだい？」

「「「あ」「」」

「ここは絵を描く場所であって、井戸端会議するばしょじゃないよ」
にっこり笑顔の拓也先輩の周りには吹雪がまってるように感じた。

「「アハハハハ」」

バタバタと慌て自分達の定位置へと移動した。

まったく、とため息を着きながら拓也先輩は沙耶花の席の前に腰掛けた。

「大変ですね」

沙耶花は拓也先輩に声をかけた。その言葉に苦笑しながら、君だけだよそう言ってくれるのは、と呟いて席を離れた。

拓也先輩は乾燥棚からミント色に塗られたキャンパスを取り出し自分の定位置の席へと移動した。

あの絵、拓也先輩のだったんだ。

声をかけられた嬉しさと共に先輩の告白騒ぎと胸の中がざわついていた。

こっそり見つめながら、沙耶花いつまでも流れ続ける”滝”の絵を描き始めた。

まるで自分の心のように浮き上がり、落ちていく。

先輩と一緒に空間にいられるのも今年いっぱいかぁ。

この絵のように、いつまでも同じ時を刻むことは叶わない、そう思うと手が止まってしまった。

「・・・ちゃん、沙耶花ちゃん」

「はい!？」

顔を上げると、部室は薄暗く目の前には拓也先輩が立っていた。

「熱中するのはいいけど、もう最終下校時刻だよ」

「え！」

そう言われて、沙耶花は周りを見るとすでに部員は沙耶花と拓也先輩以外皆居なくなっていた。

鞘かはいそいで帰り支度を始めた、その様子を拓也先輩は机に腰掛けながら見つめた。

「……沙耶花ちゃんは何も聞いてこないね。」

「え？何がですか？」

「俺の好きな人について」

「え？」

口の中に苦いものが広がった。

だって、そんなの聞きたくない。

それが沙耶花の本音だった。

「……聞いた方がよかったですか？」

「……そうだね」

「じゃ、聞きません。」

「え？」

「私優しくないんで、聞きません」

「沙耶花ちゃんって変わってるよね」

「芸術家は皆変わり者なんですよ」

鞆を閉めて、沙耶花は立ち上がった。

帰り支度が整った沙耶花は、机から動かない先輩を不思議そうに見た。

美術室の窓からは外の街灯の光が入り先輩の顔を隠していた。

「君だよ」

呟かれた言葉の意味は、闇と一緒に溶けてしまい沙耶花は一瞬何を言われたか分からなかった。

「え？」

「遠まわしの方法で攻めても無駄みたいだしね、正面きって突破することにした。」

「へ？先輩の言ってる意味の方がわかりません！」

沙耶花はますます混乱して、拓也先輩を見上げた。

「だって、君拗ねちゃって俺のこと今日全然見てくれないだろ？」

「すね……」

「このままほっとくと、ひとり拗ねて溶けちゃいそうだしね」

「先輩！顔近いです！」

どンドン近づいてくる拓也先輩に後ずさりながら、沙耶花は顔に熱が集まるのを感じた。

「クールなのもいいけど、俺の前では甘い顔しててよ」

背中が美術室の壁の柱に当たり、これ以上下がれなくなると拓也先輩が困むように沙耶花を閉じ込め、額をコツリとぶつけた。

「意味が……わからないですう。」

拓也先輩の胸に手を当てて押ししてもビクともせず、沙耶花はこれ以上先輩の顔を見れずに目を瞑った。

すると、唇に暖かくしっとりとした感触があたった。

「甘い、また、ミントチョコの飴食べてたの？」

「っ……！」

「俺は、沙耶花が好き。沙耶花は俺のこと好き？」

「すぎです。」

美術室の床に映るシルエットが一つになった。

まだ、暑さが残る暗い夜の美術室。

後日談

こつそり、二人でお付き合いするようになった私たちは、また今日も誰も来ない部室でアイスを食べていた。

私は大好きなチョココミント味のアイス、先輩は抹茶味。

チョココミントのアイスを食べながら私はふと思いついた。

「そういえば、拓也先輩。なんで私のことチョココミントみたいって言っただんですか？」

「だって君が言ったじゃないか、チョココミントは”甘くて爽やかで早く食べないとすぐ溶けちゃうしなかなか売ってなくて、とつてもレアだ”ってね」

私は、ん〜と唸りながらそういえば言ったことを思い出した。

「爽やかでクールな君は実は凄い甘えん坊」

私が持っているチョココミントアイスを先輩はスプーンでひょいっと溶けて柔らかくなった所をかつさわれた。

「あっ！」

「かまってあげないとすぐすねてしまう。」

先輩の抹茶を奪おうとするも、先輩はひょいひょい避けて取らせてくれない。

「笑顔を見せる相手が実は心を許した人だけ」

片手で軽く抱きしめられ、顔が近くなる。

あ、拓也先輩の瞳って結構茶色だ。

そう思っているうちに、ペロりと舐められた。

「ほら、チヨコミントみたいだ」

私の手にあるチヨコミントのカップはとろとろに溶けてきていた。

美術室の廊下から。

「入れね〜」

「今入ったら、絶対拓也に殺される。」

「えーあの二人そうだったんだ。」

「先輩達アツアツですね〜いいな〜」

美術部員は全員実は来ているけど、中に入れずじまい。

「今日は、お開きだな〜」

先輩の一人がそう言うと、他の部員たちは小さく返事してその場か

ら去っていった。

「沙耶花って大学決まってる？」

「決まってないです。」

「じゃー俺の大学で決まりね」

「え？」

「決まり」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2922y/>

チョココメント

2011年11月13日21時37分発行